

主 題：真の信仰者とみことば

聖書箇所：ヤコブの手紙 1章22－27節

人は主のみことばに対してどのような責任をもっているのか、ヤコブは私たちに大切な責任があることを教えています。前回見たように、私たちはまず、このみことばを受け入れることが必要であるとヤコブは命じました。21節に「**心に植えつけられたみことばを、すなおに受け入れなさい。**」と教えています。なぜ私たちがみことばをすなおに受け入れることが必要なのか、二つの理由を見ました。一つは、みことばは私たちに罪の赦し、救いをもたらすからです。もう一つは、みことばは私たちの信仰を成長させて行きます。だから、みことばが必要だと言うのです。しかも、すなおに受け入れなさいと説明を加えます。つまり、正しい態度をもってみことばを聞かなければならないということを教えたのです。自分の考えが一番で何があっても変えようとしなさい、そのような頑なな態度ではなくて、すなおで従順に学ぼうとする態度をもってみことばを謙虚に聞くことが必要であるとヤコブが教えてくれたのです。そして、そのような態度をもってみことばを受け入れることを、今すぐ始めなければいけないのだと、それが私たちがこれまで学んできたことです。みことばを聞くこと学ぶことの大切さを訴えたヤコブは、今日私たちが学んで行くみことばを通して、みことばを実行する人になりなさいと私たちに命じるのです。

☆みことばに対する正しい態度

●みことばを実行する人になる

22節「**また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。**」と、この節は「なりなさい」という動詞をもって始まります。ヤコブがそのように記したのはそのことを彼が一番強調したかったからです。このような人になりなさい、「**みことばを実行する人に**」なるようにと彼は命じるのです。これが現在形で記されているのは、そのような人であり続けて行きなさいということです。同時に、このみことばはこのよう人にならなければならないということも記されています。それは「**聞くだけの者であってははいけません**」と、ただ聞くだけの者ではいけないと言うのです。なぜでしょう？みことばをただ聞くだけの者への警告をこのみことばの中に見ます。

○もし、私たちがみことばを聞くだけの者であったなら、

- ・ 神の祝福をいただくことがありません。

大切な神からの祝福を逃してしまいます。詩篇1：2－3に「**まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。**」とあります。この人は常にみことばを覚え考えているのです。そういう人はどうなるのでしょうか？「**3 その人は、水路のそばに植わった木のような。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしても栄える。**」と、神の祝福はこの人がみことばを実行するところにあるのです。同時に、

- ・ 信仰の成長がありません。

1ペテロ2：2に「**生まれただけの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。**」とペテロは教えています。みことばを実践することがなければ信仰の成長は望めないのです。シカゴ・ムーディー教会の牧師であったウォーレン・ウエズビーはこのように言っています。「多くのクリスチャンが聖書に線を引き印をつけている。しかし、彼らの聖書が彼ら自身に印をつけていない。」と。みことばが私たちの生活に、生き方に影響を与えていなければ、どんなにたくさん線を引いてもそれがどんな意味になるのでしょうか？もう一つあります。

- ・ 救われていない可能性がある。

これは恐ろしいことです。22節を見ると「**自分を欺いて**」と記されています。つまりヤコブはここで、みことばをただ聞くだけの者は自分自身を欺いていると言うのです。これは誤った議論をして欺くとか、だますという意味です。ただみことばを聞いている人は自分自身をだましている、自分自身を欺いている、その可能性があると言うのです。コロサイ2：4にも「**私がこう言うのは、だれもまことしやかな議論によって、あなたがたをあやまちに導くことのないためです。**」とあります。どういうことでしょうか？あるクリスチャンはもう今の状態でかまわないと思っています。罪の赦しをいただいたし、天国に行けるのだから、もう今のままでかまわないと。実はその人はだまされているのです。なぜなら、みことばはそのようには教えていないからです。みことばを聞くことが最終的な目的になってしまっただけで満足するのです。肝心なことを忘れています。みことばを聞くというのは始まりでしかないのです。そして、みことばを聞いた者には責任が生じるということが分かっているのです。私たちイエス・キリストを信じている者はそのことをしっかり覚えておかなければいけないのです。ではみ

ことばを聞かないほうが責任がなくて良いのでしょうか？それは大きな問題です。救われた者はみことばを聞きたくなくて来るはずです。そして、聞いた者は神から大きな責任をいただいているのだということをより深く認識しています。どのような責任か、みことばを行なうか行なわないかという責任です。神が言われることを行なうか行なわないかという責任です。クリスチャンがみことばが教えていない偽りによって、みことばを実践することは大変だからもういいと思ってしまうことも大きな問題ですが、それ以上に問題なのは、救われていない人が救われていると思い込んでいることです。私たちの周りで「どうしたら人は救われますか？どうすれば罪の赦しをいただくことができますか」と質問するなら、それに対していろいろな答えが返ってきます。ある人はこのように言うかもしれません。それは行ないによってですと。礼拝にちゃんと来ればいい、集会にも出席し、いろいろな奉仕もしている、私はバプテスマを受けていますと、このようなことを救いの根拠にしている人は実際にいます。〇〇をしているから神は救ってくださるのだと。みことばはそれが過ちであることを教えてくれます。マタイ7章でイエスはこのように言われました。「**：22 その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』**：23 **しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』**」と。このみことばで私たちが教えられることは、さばきのときにある人々はこんなことをしたではないですか、預言をし悪霊を追い出し、いろいろな奇蹟をあなたの名によって行なったではないですかと言います。ところがその人たちに対してイエスは『**わたしはあなたがたを全然知らない。**』と言われます。つまり、彼らはそのようなことを行なってはいたのですが、救われていなかったのです。どんなに立派なわざを為したとしても、行ないは私たちを救わないのです。しかし、そのように信じ込んでいる人がいるのです。それで自分は救われていると思い込んでいる、自らを欺いているのです。また、ある人は知識によって救われると思っています。知識があるから、知っているから大丈夫と。特にクリスチャンホームなど、そのような環境で育つと起こり得ることです。子どもたちはよく知っています。信仰を疑うこともない、話をずっと聞いているし、自分が救われていないなどと思ってもいいない、皆救われて天国へ行けると信じています。いろいろな質問にはちゃんと答えが返ってきます。しかし、知識があるということと救われていることは同じではないのです。サタンも知っています。いろいろな真理を。このヤコブの手紙の2：19で「**あなたは、神はおひとりだと信じています。りっぱなことです。ですが、悪霊どももそう信じて、身震いしています。**」とヤコブは記しています。だからサタンも救われているかという救われていません。ですから、どれだけ立派なことを行なったとしても、どれだけたくさんの知識をもっていたとしても、行ないも知識も私たちを救うことはないのです。

では、何によって私たちは救われるのでしょうか？みことばが教えてくれます。それは信仰によってのみだと。ローマ3：28でパウロは「**人が義と認められるのは、律法の行ないによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです。**」と教えています。私たちの身代わりとなって十字架で死によみがえられたこの救い主イエス・キリストを信じる信仰です。ルカ6：46－49を見ましょう。「**なぜ、わたしを『主よ、主よ。』と呼びながら、わたしの言うことを行なわないのですか。：47 わたしのもとに来て、わたしのことばを聞き、それを行なう人たちがどんな人に似ているか、あなたがたに示しましょう。：48 その人は、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、それから家を建てた人に似ています。洪水になり、川の水がその家に押し寄せたときも、しっかり建てられていたから、びくともしませんでした。：49 聞いても実行しない人は、土台なしで地面に家を建てた人に似ています。川の水が押し寄せると、家は一ぺんに倒れてしまい、そのこわれ方はひどいものとなりました。**」とあります。大変な結果が記されています。何が違ったのでしょうか？このみことばが私たちに教えてくれるのは「**わたしのもとに来て、わたしのことばを聞き、それを行なう人たち**」と「**聞いても実行しない人**」とあります。聞くだけ聞いて何もしない人と聞いたことを実行する人とは全然違う結果が待っていると言うのです。私たちはどんなに神のみことばを聞いても私たちがそのみことばを心から受け入れてこのイエスを信じて従って行こうという選択をするまで、この救いをいただくことはないのです。聞くだけの者には救いはない、選択をしなければいけない、決心が必要なのです。イエスを信じて主として従って行くという選択です。

ヤコブが言いたいこと、それは本当の信仰には必ず証拠が存在するということです。生まれ変わった人、救われた人には必ず変化が生まれるのだと言います。みことばを実践する者となって行くと。そのことをヤコブはこの手紙の中で、繰り返し繰り返し教えています。そして、そのことによって読者たちが自分の信仰を正しく吟味するようにと彼は訴え続けるのです。そのことについてヨハネも私たちに同じことを教えています。I ヨハネ2：3－6を見ますが、それを見ることによって自分の信仰を吟味してください。ヨハネは私たちにこういう人が救われているのだと教えるのですから、それを見て自分の信仰はどうか吟味してください。なぜなら、このような話になると皆自分は救われているのかどう

か疑い始めるからです。「:3もし、私たちが神の命令を守るなら、それによって、私たちは神を知っていることがわかります。:4 神を知っていると一言いながら、その命令を守らない者は、偽り者であり、真理はその人のうちにありません。:5 しかし、みことばを守っている者なら、その人のうちには、確かに神の愛が全うされているのです。それによって、私たちが神のうちにいることがわかります。:6 神のうちにとどまっていると言う者は、自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません。」と、イエスが歩まれたように自分も歩んで行こうとします。このような変化が私たちのうちに起こるのです。次に I ヨハネ 3 : 9 - 10 を見てください。「だれでも神から生まれた者は、罪のうちに歩みません。なぜなら、神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪のうちに歩むことができないのです。:10 そのことによって、神の子どもと悪魔の子どもとの区別がはっきりします。義を行なわない者はだれも、神から出た者ではありません。兄弟を愛さない者もそうです。」と私たちは神の子どもか悪魔の子どものかどちらかに属すると言います。悪魔の子どもは罪を犯し続けて行くのです。神の前に正しいことをしようという関心がありません。では、神の子どもはどうでしょう？正しいことを行なうて行こうとします。私たちが神のみことばを学んで行くときにみことばを通して神のみこころを知ります。つまり、これが神が私に望んでおられることだ、このように生きて行きなさいと教えてくれると、そのみこころが示されたときに救われている人は失敗をしながらもそのように生きて行きたいと願っている人です。パウロがそのことについて教えてくれます。ローマ 7 : 18 - 19 **「私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。」**、これは救われている人の特徴です。善をしたいという願いがいつもあるのです。神の前に正しいことをして行きたいという願いがあるのです。そのようにパウロは自分のことを証しているのです。19 節 **「私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。」**と、彼の中にこういう変化が訪れたのです。善を行いたい、悪を行ないたくないという思いです。救われているからです。

そのことを教えたヤコブは次に、なぜ私たちはみことばを実行することができないのか、その問題点、理由を 23 節から教えて行きます。「:23 みことばを聞いても行なわない人がいるなら、その人は自分の生まれつきの顔を鏡で見る人のようです。:24 自分をながめてから立ち去ると、すぐにそれがどのようなであったかを忘れてしまいます。」、ここで「自分の生まれつきの顔を鏡で見る」とこの「見る」ということばに注目してください。そして、25 節 **「ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。こういう人は、その行ないによって祝福されます。」**、「一心に見つめて離れない人」とここに注意してください。この違いがみことばを実行できるかどうかの大きなカギなのです。なぜみことばを実行できないのか、その原因はみことばに対する真剣さが問題です。23, 24 節に書かれていることは私たちによく分かることです。鏡の前に座って自分の顔を見てもそこから離れると、自分の顔をすぐに忘れてしまいます。ある神学者はここでは男性のことが言われている、女性はもっと真剣に自分の顔を見るからと言いますが、いずれにせよ、私たちは自分の顔を見ても次の瞬間そこを離れるとそれを忘れてしまうのです。つまり、そのことをもってヤコブは私たちはすぐに忘れてしまう、そこに問題があるのだということを教えるのです。みことばを熱心に聞いているかもしれない、よく考えようとしているかもしれない、しかし、その場で覚えていてもすぐに忘れてしまうのです。今日ここでみことばを聞いてどれ位の間覚えているでしょう？夕方にはかなり忘れているかもしれません。明日になれば昨日のメッセージは何だったかな？とそのようになる人もいでしょう。だから、私たちはみことばを実践できないのです。なぜなら、何が神のみこころか、神は私に何を望んでおられるのかを忘れたならそうならないからです。私たちの問題は、神が私たちに何を期待しておられるのか、何を命じておられるのかをすぐに忘れてしまうことです。

ではどうすれば良いのか、どうすればみことばを実践できるのでしょうか？25 節からヤコブは教えて行きます。「**一心に見つめる**」ということばは「傍らに」と「身をかがめる」ということばが合成してできたことばです。イエスが墓に納められた後、三日後によみがえられた、そのことを聞いた弟子たちは墓に急ぎました。そこで彼らは身をかがめてその墓の中をのぞき込んだとルカ 24 章 (24:12 **しかしペテロは、立ち上がると走って墓へ行き、かがんでのぞき込んだところ**)、ヨハネ 20 章 (20:5 **そして、からだをかがめてのぞき込み**) に記されています。彼らは本当だろうかとしっかり中を見たのです。そういうことばがここに使われているのです。もう少しヤコブがここで言いたいことを見てみると、「**一心に見つめて**」の後に「**離れない**」という動詞がついています。これは「傍らに」「留まる」という二つの意味が合成してできたことばです。止めない、続けるという意味です。つまり、神のみことばを継続して真剣に考え続けて行くように、そのことを止めないようと言うのです。「聞いていても実行できない人」はそのときは熱心に聞いているかもしれないが、すぐに忘れるのです。事を実行できる人というのは、聞いたことを一生懸命継続して考え続けて行くのです。だから、事ができるというのです。しかも、ヤコブは何を真剣に見つめ続けるのかを教えます。「**完全な律法**」と記されています。仕上げられた完成したもので

す。神のみことばです。ここに律法と記されているのは神が与えてくださった命令です。神が私たちクリスチャンに望んでおられることです。その「**完全な律法**」はどのような働きをするのか、「**すなわち自由の律法を**」と書かれています。完全な律法が自由を与えるのだという意味です。つまり、ヤコブが言いたかったことは、みことばは私たちに大変な働きを為す、一言で言うなら自由をもたらすと。みことばは私たちに真理を与えてくれます。神について私たちはこの聖書から知ることができます。人についても知ることができます。自分自身のほんとうの姿を聖書を見ると示されて行きます。未来について、永遠について知ります。そして、聖書が教える救いを知り私たちがそれを受け入れたとき、私たちには自由が与えられるのです。罪からの自由、永遠のさばきからの自由です。そして同時に、このみことばに私たちが従い続けて行くことによって、私たちはますます罪から解放されて自由を得て行くのです。イエスがこのようなことをヨハネ8章で言われました。8：31－32「**そこでイエスは、その信じたユダヤ人たちに言われた。「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。：32** **そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」**」、神のみことばによってあなたはますます罪から解放され変えられて行くと言うのです。そのような力をみことばは持っているのです。一心に見つめるものを間違えるとこのような結果は生まれて来ないのです。もし私たちが自分自身を一心に見つめたなら、このようなすばらしい結果は私たちに訪れません。自分を見つめるなら自由を得ることもない、そして、次第に苦しくなって来ます。自分は本当に罪深い、役に立たない、価値がない、どうにもならない存在だと、そうしてどんどん落ち込んで行くのです。ヤコブは私たちが見つめなければならないのは、自分ではなくて神の律法、神の教えだと言います。それを私たちがしっかり見つめ続けているなら、その人はすぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行することができるのだと教えるのです。神が教えてくださることを覚え続け、事を成さしめてくださる神に助けを求めながら歩んで行くことです。そうすることによって私たちは少しづつ事を実行するものになって行くのです。私たちは神のみことばに対して真剣でなければならない、真剣であればあるほど事を実行し、事を実行することによってますます神の栄光を現わして行くのです。なぜなら、私たちは変えられて行くからです。そして、このような人を神は祝すと言われます。25節の最後に「**こういう人は、その行ないによって祝福されます。**」とある通りです。聞くだけの者と聞いたことを実行する者、言い方を変えるなら、形だけで心の伴わない者と心の伴っている者、そのことをここで比較しながら、私たち一人一人が心が伴った信仰者であるようにとヤコブは勧めるのです。

○神の前に価値ある信仰とは？

ヤコブは26－27節で、信仰者として心が大切であることを教えて行きます。私たちが神に喜ばれる信仰者になって行くために必要なものは心です。心が正しくなければならぬのです。26節に「**自分は宗教に熱心であると思っても、**」とあります。26節の最後にも「**人の宗教は**」とあり、27節にも「**汚れない宗教は**」と出てきます。「宗教」ということばが三つ出てきますが、最初の「宗教」と後の二つの「宗教」とは語源は同じですが、最初は形容詞、後は名詞です。後の「宗教」という名詞は「礼拝」と訳すこともできるのですが、最初の「**宗教に熱心であると思っても、**」の形容詞である「宗教」は、礼拝の中で為されている様々な行為を指しているのです。外的な行為です。たとえば、儀式を守るとか、礼典を守るとか、さまざまな祭りをするとか、そのような行為です。つまりヤコブはここで、そのようないろいろな儀式などの行為にどのように熱心であっても、その熱心が神に喜ばれるわけではない、もっと大切なものがあると言いたかったのです。何が神に喜ばれるのでしょうか？どんなに儀式に熱心であっても「**自分の舌にくつわをかけず、自分の心を欺いているなら、そのような人の宗教はむなししいものです。**」とそのような礼拝は空しいと言います。

ヤコブはここで神が喜ばれる礼拝とはどのようなものを教えています。

(1) 自分のことばで罪を犯さないこと

そのような礼拝者であれと言います。26節に「**自分の舌にくつわをかけず**」とあります。自分のことばのことです。それを制御するように、慎むようにと言います。つまり、ヤコブは「悪いことばを一切口から出してはいけない」と言うのです。平均的に人は一日に18000語話す、それは54ページの本に匹敵する、1年では800ページの本66冊に相当する、多くの人はそれ以上に話す、平均的な人は話すことに人生の1／5を費やすと言われます。私たちはよく話すのです。だからこそ私たちのことばには注意をしなければいけないのです。箴言15：1－2でソロモンはこのように言います。「**柔らかな答えは憤りを静める。しかし激しいことばは怒りを引き起こす。：2** **知恵のある者の舌は知識をよく用い、愚かな者の口は愚かさを吐き出す。**」。また、26：20には「**たきぎがなければ火が消えるように、陰口をたたく者がなければ争いはやむ。**」とあります。パウロはエペソ4：29で「**悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。ただ、必要なとき、人の徳を養うのに役立つことばを話し、聞く人に恵みを与えなさい。**」と言います。これが神のみこころなのです。私たちのことばがどうかです。人に対する悪口であったり、人を

さばいてみたり、陰口を言ってみたり、正しくないことを言ってみたり、人を非難したり中傷したりしていないかどうかです。そのようなものは全部罪です。どのような正当的な理由をつけようとも。そのことはヤコブがこの後教えてくれます。私たちがまず学ぶことは、悪いことばを口から出さず、人の徳、信仰を高めることばを話すことです。

26節に「**自分の心を欺いている**」ということばがまた出てきます。これは22節にあることばよりも一般的なことばです。間違っただけの理由をもって自分を欺くという意味をもちます。つまり、いろいろなことを私たちが話すとき、それが間違っているときは信仰者として私たちは分かるはずですが、心の中に罪があり、その罪が解決されていないならそのようなことばが出てくるのです。そのようなとき、その人は「でも、私はこんな働きをしているから神は赦し喜んでくださるに違いない」と間違っただけの理由をもって自分をだますのです。そのことを言っているのです。ことばにではなく心に問題があるのです。心が正しくないのです。それが清算されるまで神の祝福はありません。嘘で自分をだまし罪を容認しているのです。「**そのような人の宗教はむなししいものです。**」と、そのような人のささげる礼拝はむなししいと言うのです。価値がない、神は喜ばれないと。

(2) 弱いものを助けなさい

27節「**父なる神の御前でよく汚れのない宗教は、孤児や、やもめたちが困っているときに世話をし、**」と、27節の最初は26節の最後の「宗教」ということばを受けて書かれています。神の前に喜ばれない礼拝とは何かを語り、では喜ばれる礼拝は？と27節に続くのです。弱いものを助けなさいと言うのです。孤児ややもめが困っているときは世話をしなさいと。それこそ神に喜ばれる礼拝だと言います。この時代、孤児ややもめたちは一番問題を抱えていました。相談する相手がいなかった、貧しかった、必要をいろいろと抱えていたのです。助けが必要だったのです。だから、ヤコブは言うのです。いろいろな儀式を行なうこともそれ自体は間違っていないけれど、神が喜ばれるのはそれ以上に心であり、周りにいる困っている人たちへの助け、励まし、慰めであると。そして三つ目に、

(3) 罪から離れること

「**この世から自分をきよく守ることです。**」と自分自身罪から離れることだと言います。この世の罪や汚れに染まらないようにと教えています。自分自身のきよさをしっかり見張るようにとヤコブは言ったのです。こういう信仰こそ神の前に価値があり、神は喜ばれるのだとヤコブは教えるのです。

今日のまとめです。主の前に価値のない宗教、礼拝とは、信者にふさわしくないことばを話すことです。同時に形だけの信仰も喜ばれません。問題は内側です。美しい建物があっても、すばらしい音楽がありプログラムがあっても、神が望んでおられるのは私たちの心です。礼拝者としてふさわしい心をもって主の前に立っているかどうかです。そして最後に、この世と妥協して生きること、それは神が望まれないことです。みことばを実践しなさいと教えます。みことばが教えてくれることはすべてそこにつながってきます。信仰者としてどのように生きるのか、私たちの生き方はこの世に対する大きな証です。イエス・キリストの話を聞いて群衆はその教えに驚嘆しました。そのとき一人の女性がこんなことを言います。「**あなたを産んだ腹、あなたが吸った乳房は幸いです。**」と、彼女はイエスの話を聞いて「あなたの母親は何とすばらしい、こんな偉大な人を産んだのだから」と言います。そのときイエスはこのように言います。「**いや、幸いなのは、神のことばを聞いてそれを守る人たちです。**」と。そういう人を神は喜び祝してくださるのです。あなたがそういう人であるかどうかです。もし、今までそうでなかったなら今日から神のみことばに、神のみこころに忠実に従って行く者になるかどうか、その選択はあなたがしなければなりません。願うことは、あなたが主の前に正しく歩んで行きたい、そのことによってすばらしい私の救い主の栄光を現わすことができるからと、そのような選択をして正しい歩みをなすことです。イエスをまだ信じておられない方、あなたの責任は神の前に自らの罪を悔い改めて救いを求めて出て来ることです。主はあなたの罪をすべて赦してくださる、そのためにはあなたが決心しなければならない、今日から私はこの主を信じ従って行こうと、その決心をもって新しい歩みを始めてくださることを心からお勧めします。